



世界の農業・農政

アフリカにおける穀物の需給動向と生産における課題 — トウモロコシとコメに焦点を当てて —

国際領域 研究員 草野 拓司

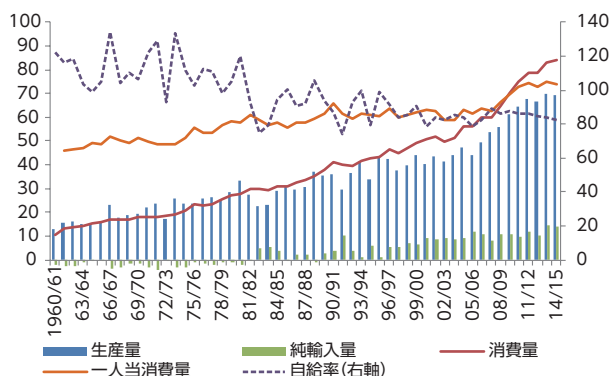
1. はじめに

近年、アフリカによる穀物輸入が急増しています。アフリカの人口が世界に占める割合は16%であるのに対し、穀物輸入量は23%まで拡大しており、アフリカにおける穀物需給が国際市場において強い影響力を持ち始めていることから、その需給動向を正確に捉えることが求められています。そこで本稿では、アフリカにおける最大の主食穀物であるトウモロコシと近年需要が急増しているコメを取り上げ、その需給動向を整理します。また、それらの増産要因を検討することにより、現在のアフリカにおける穀物生産の課題を提起します。なお、サブサハラ・アフリカ（以下、SSA）と北アフリカ（以下、NA）では農業生産や消費の形態に大きな違いがあることから、以下では両地域を対比して見ていくこととします。

2. アフリカにおけるトウモロコシとコメの需給動向

(1) トウモロコシ

トウモロコシはアフリカで最も多く食されている伝統的な主食穀物で、特に東部と南部では最大の主食穀物です。第1図によりその需給をみると、生産量は増加を続け、近年では7,000万トンに到達



第1図 アフリカにおけるトウモロコシの需給
(単位: 100万トン, kg/年, %)

資料: USDA(PSD Online)およびFAOSTATより筆者作成。

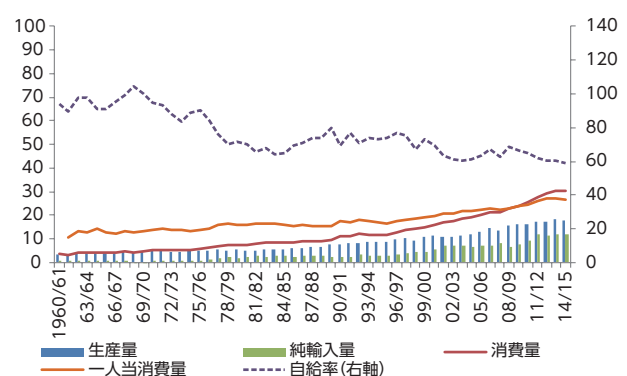
注(1) 2014/15年は推定値。

(2) 純輸入のマイナス値 (= 純輸出) は省略したが、1960年代から1970年代には数十万トン～数百万トンの純輸出があった。

しています（内訳はSSAが91%, NAが9%）。しかし、需要拡大が増産ペースを上回っているため、2005/06年以降の純輸入量はおおむね1,000万トンを超えており、過去に100%を超えていた自給率は80～90%程度まで低下しています。消費量の増加は、人口増加および一人当たり消費量の増加によるもので、一人当たり消費量増加の主因は、NAにおける飼料用トウモロコシ消費量の増加にあります。SSAでは依然として大部分のトウモロコシは食料として消費されていますが、NAでは、近年の経済成長に伴って畜産物への需要が増加していることから、飼料用トウモロコシの需要が急増したことにより、一人当たり消費量（年間）が101kgまで増加しているのです（SSAは68kg）。なお、SSAだけで見れば自給を達成しているのですが、依然として飢餓人口の割合が約25%存在することから、実質的には、ここで示したデータ以上にトウモロコシが不足した状況にあると言えます。

(2) コメ

第2図でコメの需給をみると、生産量は増加を続け、2014/15年には1,800万トンに達しています（内訳はSSAが73%, NAが23%）。しかし、それを大きく上回るペースで需要が伸びているため、近年の純輸入量は1,200万トンまで増加しており、自給率は60%以下まで低下しています。この自給率の低下の



第2図 アフリカにおけるコメの需給
(単位: 100万トン, kg/年, %)

資料: 第1図と同じ。

注(1) 2014/15年は推定値。

(2) 純輸入のマイナス値 (= 純輸出) は省略したが、1968/69年には18.3万トン、1969/70年には1.7万トンの純輸出がある。

主因も、一人当たり消費量の増加にあります。西アフリカを中心としたSSAの各地域において、経済成長に伴う国民所得の増大により、コメの消費量が増加しているのです。

3. トウモロコシとコメの増産要因にみる アフリカの穀物生産の課題

ここまで見たように、トウモロコシとコメは増産を続けているものの、それを上回るペースで需要が拡大しているため、純輸入量が増加していました。ここでは、第1表で増産要因をみながら、アフリカにおけるトウモロコシ生産とコメ生産の課題を整理しましょう。

はじめに、トウモロコシを見ていきましょう。トウモロコシの場合、需要拡大の主因は、NAにおける飼料用トウモロコシ需要の増大にありました。そこでNAの増産要因をみると、単収は1961/62年の1.7トンから、2014/15年には4.2倍の7.2トンまで増加しており、世界でも有数の単収に達していると言えます。しかし、問題なのは収穫面積の減少です。NAの収穫面積は、122万ヘクタールから39万ヘクタール減少し、83万ヘクタールとなっています。これは、近年のコメ等への需要拡大に伴い、トウモロコシからコメ等へ作付転換が起きているために生じているものと考えられます。一方、SSAにおける増産は、単収ではなく、収穫面積の増加に大きく依存していることが分かります。

次に、コメを見ていきましょう。コメの場合、需要拡大の主因は、SSAにおける経済成長に伴う国民所得の増大にありました。そこで、SSAにおける増産要因をみると、0.9トンだった単収が1.4倍の1.3トンまでしか増加していませんが、収穫面積は262万ヘクタールから3.7倍の975万ヘクタールへと大きく増加しています。一方、NAでは、収穫面積の増加に加え、単収が世界でも有数の水準に達したことが

増産に大きく寄与しています。

このように、SSAで収穫面積の拡大による増産が行われてきたのは、インフラが未整備であるため、効果的な出荷先を見つけられない農民の増産インセンティブが働きにくいことに加え、SSAでは労働力や資本に比べて土地が相対的に豊富なため、土地拡大の方が投入財を増大させるよりも経済的にみて合理的な選択になっているためと考えられます。一方のNAでは、経済の発展段階がSSAを上回っており、インフラ等がある程度整備されているため、投入財の増大によって単収を増加させることがより合理的であったため、単収の増大が増産の主因になってきたと考えられます。

4. おわりに

アフリカでは、人口増加に加え、経済成長に伴う国民所得の増大により、トウモロコシとコメの一人当たり消費量が増加したことで、増産が需要に追いつかず、輸入量が拡大しています。トウモロコシについては、飼料用の需要が急増しているNAにおいて、単収は拡大しているものの、コメ等への作付転換が進んでいることから、収穫面積の減少が顕著です。コメの需要が急増しているSSAでは、インフラの未整備などを背景に、増産の大部分は収穫面積の拡大によって達成されており、単収を飛躍的に増加させる段階にはありません。つまり、インドなどのアジア諸国では、収穫面積を維持あるいは一定程度増加させながら単収を大きく飛躍させることで穀物需要の急増に対応してきました（いわゆる「緑の革命」）が、アフリカにおいては依然としてそれが困難な段階にあると言えるのです。アフリカにおけるさらなる人口増加と経済成長が予想されることから、トウモロコシとコメを中心とした穀物の需要が拡大する可能性が高いと考えられます。今後、アフリカの穀物需給動向に注視する必要性がさらに増していくと言えるでしょう。

第1表 トウモロコシとコメの増産要因

(単位: t/ha, 1,000ha)

		1961/62年		1981/82年		2001/02年		2011/12年		2014/15年	
		実数		実数	(指数)	実数	(指数)	実数	(指数)	実数	(指数)
トウモロコシ	単収	NA	1.7	2.9	(171)	6.2	(365)	6.5	(382)	7.2	(424)
		SSA	1.1	1.3	(118)	1.5	(136)	1.8	(164)	1.9	(173)
	収穫面積	NA	1,223	1,198	(98)	979	(80)	948	(78)	831	(68)
		SSA	11,745	18,850	(160)	24,034	(205)	32,689	(278)	32,824	(279)
コメ	単収	NA	3.5	3.8	(109)	6.2	(177)	6.3	(180)	6.2	(177)
		SSA	0.9	0.9	(100)	1.0	(111)	1.4	(156)	1.3	(144)
	収穫面積	NA	298	418	(140)	609	(204)	647	(217)	797	(267)
		SSA	2,618	4,328	(165)	7,104	(271)	9,593	(366)	9,754	(373)

資料: USDA(PS&D Online)より筆者作成。

注(1) それぞれ3ヵ年平均値をとっている。ただし、2014/15年は2013/14年との2ヵ年平均としてある。

(2) 指数は1961/62年の値を100としたものの。